

振り返れば、昨年秋ツイッターやブログ、動画でも「新曲の発売が決まりました、タイトルは『心機一転』です」と連呼していたのを思い出します。

ネットサイン会でも、熱心に前ぶれを行っていた。コロナ禍、歌手は誰でもそうであったように、密になるからとファンの前には顔をだせずに、とても根気のいる予約キャンペーンをこなしていたことが容易に想像出来ます。

年が明けて1月4日、発売すると第1週、チャート情報誌ではオールジャンル総合で6位、演歌チャートでは1位を獲得している。やってくれました、が、ここがスタート。

作家は可能性のある歌手と出会い、歌手は可能性のある作品と出会う、この出会いは偶然であり運命であり、ヒットへの第一歩となるのです。勝負の1年、辰巳ゆうとは「心機一転」を背負って歩いてくれています。

他人事のように書いてきた久仁京介も、仕事は完全に2年の空白がありました。正に心機一転の境地でした。ジジイになっても心機一転とはお笑いでしょう。60歳定年で仕事を終え、その後20年以上の日々を豊かに、楽しみを優先して過ごしている人もおります。仕事を生き甲斐として淡々と励んでいる人もいます。そして久仁京介のように抜け出せず延々と続ける人もいます。どう生きていこうとそれぞれの人生ですから勝手ですが、まだ心機一転などと云っているのは如何なものか。

多くの高齢者の運転事故が連日テレビを賑わしているが、いま自動車運転免許の更新に認知機能検査がある。この山も越えなければと思っている。越えてみれば大きな峠ではないだろうが、見上げる峠はなかなか高く見える。

辰巳ゆうと君には「百里行くのが人生ならば九十九里が折り返し」と唄わせているが、いや難儀なものです。楽しく頑張って、もう少し行けたならいいな、と思っている。